

こどものこころが見えてくる本

臨床心理士が提案する ちょっとあたらしい教育心理学のかたち

仲 淳 著



単行本：222 ページ
出版社：あいり出版
発行日：2010/11/25 初版 第1刷
ISBN：978-4-901903-36-3
価格：2,100 円＋税

主要目次

まえがき

第1章 こどもとは？教育とは？ (p.1)

第2章 こどもはのびゆく存在ですー発達 (p.11)

第3章 こどもはまなびますー学習と記憶 (p.35)

第4章 こどものやる気ー動機づけ・モチベーション (p.57)

第5章 こどもはみんなクリエイターー知能と創造性 (p.75)

第6章 こどもはみんな個性的ー人格・性格 (p.95)

第7章 こどもはいつもがんばっていますー適応 (p.115)

第8章 こどもはいどみますー障害（しようがい） (p.131)

第9章 こどもをまなざすー教育評価 (p.163)

第10章 こどもとつながるーコミュニケーション (p.177)

あとがき (p.214)

著者紹介

仲淳（なかあつし）1974年生。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、天理大学人間学部総合教育研究センター准教授。京都市教育相談総合センター嘱託カウンセラー。臨床心理士。

▼ 本書を「ひと言」で言うと / Abstract

こどもの様々な言動や育ちを、図解入りでわかりやすく心理学の視点から解説。「こどものこころ」の理解によって、より良い育児や教育、支援のヒントが得られます。子育て中の方、教育や保育に携わる方、教育心理学に興味をもつ学生も読者対象となる子育て教育の参考書です。

▼ インロ部分だけ、抜き出して紹介 / Introduction

まえがき

教育やこどもに対する関心が高まっています。書店に行けば、育児書や教育本が山積みです。たくさんの保護者や教師の方が、こどもとのかかわり方で悩んでいるとも聞きます。

筆者は、現在大学で教職課程の職員として勤めるかわら、臨床心理士としてこどもの心理療法（カウンセリング）に携わっています。

筆者はまだまだ駆け出しのカウンセラーなのですが、これまでこどもたちと触れあってきた経験を通して、いま現在ひとつ確信していることがあります。それは、「余計な手出しをしないでこどもを信じて待っていれば、こどもは必ず自分の力でかわっていく」ということです。

本書は、教育や子育てなどでこどもにかかわっておられる人の役に立てるように、心理学の知識をやさしくまとめ直したものです。全体を読みとおしていただくと、教育心理学の一通りの知識が得られるようになっています。

また、本書では、単に知識の整理だけにとどまらず、筆者の新米の父親としての日々の実感と、臨床心理士としての現場での実践経験を踏まえて、より具体的で実際に生かしていける「いろいろなこどもの見方」というものを提示できるように工夫しました。

本書を読み進めていっていただく中で、「あれ？こどもってそういうところがあるものなの？」「こどもって本当はすごいんだ！」というふうに、こどもというものをこれまでとは少し違う角度から見つめ直していただくきっかけのようなものをつかんでいただけたら、とてもうれしく思います。

第1章 こどもとは？教育とは？ (p.1～)

1. こどもは生きているいのち。

こどもは生きているいのちです。いのちとは計算ができないものです。どんなものが出てくるのか、中にながら入っているのか、あらかじめすべてを知り尽くしておくことができないのがいのちというものです。

つまりこどもたちは、一人ひとりが違うところからだを持った、はかり知れない存在なのです。いのちって、なんなのでしょう？いろいろな言い方ができると思うのですが、ここでは一言、「いのちとは授かりものである」という表現をしておきたいと思います。こどもという一つのいのちは、人間を超えている大きな存在から与えられたものなのであり、こどもたち一人ひとりが本来はかり知れない可能性をもったとても尊い存在なのです。

2. こどもは自然。

脳の研究などで有名な養老孟司先生は、「こどもは自然である」といわれています。科学技術が進歩して、冷暖房・空調完備の現代を生きる私たちは、あたかも自然のすべてをコントロールできるかのような錯覚に陥っていますが、実際には明日の天気一つ正確に予測することすらできていません。

自然とは、ある程度予測して対応することができるものではあるのですが、人間というちっぽけな存在の意図をはるかに超えて、それ自体の論理で動いているものなのです。

こどもという存在もまた、そういうものなのではないのでしょうか？こどもは一つのいのちなのであり、こちらがどう思おうが、こどもの中にはそのこどもの論理（思い・筋道・ペース）があるわけで、それにそぐわないことをいくらやっても、そもそもかなうものではないと思うのです。

養老先生は、子育てで最も必要なのは手入りの感覚だといわれています。「まずもって

自分で生きているこどもがいる」わけなのです。生きていく原動力はこどもたち自身の中にあるのですから、まわりのものは基本それが自然に発揮されてくるのに任せて、日々かわりながらようすを見て、時々チョットと手入れをさせてもらうことくらいしかできない。でもそれを続けているうちにだんだんなくなかたちに、様になってくる。子育ては本来そういうものではないか？ということなのです。

まず最初に、こどもという一つのいのちの中に静かに存在している偉大な存在に敬意を表する。そこから教育や子育てをスタートさせてみていいのではないのでしょうか？

3. こどもを自然になぞらえてイメージしてみましょう。

こどもは生きているいのちであり、人間のコントロールを超えた自然物であることがわかりました。それではもう少し具体的に、こどもをどういうふうイメージしていけば、実際にこどもにかかわっていくときに役立つのでしょうか？

① こどもは植物の種！（図1-1）

植物の種を日当たりのよい土地にまいて、肥料をやったり水をやったり、温度調節をしたりしていると、時期が来ればいろいろな花が咲き、実がなります。

何年前かにスマップという音楽グループが「世界に一つだけの花」という歌を歌っていましたが、「こどもたち一人ひとりそれぞれが将来その子にしか咲かせることのできない花を咲かせる種のようなもの」と考えてみることは、決して大げさなことではないと思います。咲いてくる花の色やかたち、大きさ、香りなどはさまざまだろうと思うのですが、こどもに「日当たり（あたたかい愛情）」や「肥料・水やり（食事）」、「よい土壌（環境）」などがある程度十分に用意してあげることができれば、いつか必ずその子なりに持っている能力が花開いて、結果が出てくる。そういうふう考えながら、日々筆者はこどもたちと接するようにしています。

② こどもは原石！（図1-2、1-3）

きらきら輝く宝石も、もともとの原石の状態ではゴロツとしてくすんだただの石ころです。しかし、技術を使って磨きをかけることで、その原石がぴかぴかに光ってくるわけです。

筆者は、こどもというのは原石のようなものではないかと思っています。上手に磨きをかけることによって、そのこども本来の輝きが出てくる。必要な磨きのかけ方や光り方はこどもによって違うと思うのですが、こどもは本来どの子も生まれつきにか光るものをうちに持っている存在なのではないか？と思います。あとはその素質にどう磨きをかけていくか、だろうと思うのです。

③ こどもは小川の水！（図1-4）

小川はちょろちょろ流れる小さな水です。最初は小さな流れですが、やがて起伏の激しい中流を経て、最後には大きな川になります。こどもも最初は小さくてちょろちょろやっていますが、やがては大きくなってたくたくましいエネルギーな存在になっていきます。

こどものエネルギーを無理なく流れやすい方向に導いてあげることができれば、こどもはいつか自分で自分の行くべき方向を見つけて、やがては大きなことを成し遂げたりすることのできる存在になるのではないのでしょうか？

④ こどもは熟成中の味噌！（図1-5）

味噌は年数をかけて寝かしておくことで、発酵して熟成し、香り豊かでおいしいものに仕上がります。熟成中は外からはなにが起きているのかよくわからないわけですが、じっくり見守り続

ける中で、内側からじわじわと変化が起こってくるわけです。

こどももまた、ゆっくりじわじわと中から変わっていくものなのではないでしょうか？

思春期などになると、こどもは自分の部屋に引きこもって全然外に出ない、というようなこともあったりしますが、そういう時は「こどもはいま自分を熟成中なのかなあ？」と思って、少し長い目で見守ることができるといいかもしれませんね。

⑤ こどものこころは頑丈な金庫？（図1-6）

最後は自然物とはちょっと違ったたとえになるのですが、こどものこころというと、どうしても大人は軽く見てしまったりするのですが、こどものこころの扉を拓くという時に、金庫のようなものを思い浮かべてもらうと、とてもわかりやすいところがあるのではないかと思います。

中にはとっても大切なものが入っている。しまいこまれている。でも簡単には開かないもの。慎重に慎重に何重にもロックされているダイヤルをまわして、すべてのダイヤルが正しく並んだときに、クリック音がして中から光り輝く財宝のようなものが出てくるもの。それがこどものこころというものではないか？筆者は時々そういうふう思うことがあります。

4. 教育（子育て）とは引き出すこと。

それでは、ここまでこどもというものをいくつかイメージにたどって見てきましたが、そのこどもにかかわっていく教育（子育て）とは一体なんなののでしょうか？こどもに対して、そもそもどんなかかわりを持っていく営みなのでしょう？

教育というと、私たちは漠然と、「学校や塾に通わせること」とか、「ピアノや英語を習わせること」、「なにが技術（資格）を身につけさせること」という風に考えてしまいがちです。でも、本当の教育ってそういうものなのでしょう？

漢字で「教育」と書くと、すごくかたくて厳しいものをイメージしてしまいがちなのですが、ここではちょっと視点をえて、英語で教育を表す **education**（エデュケーション）ということばの語源から、本来の教育というもののかたちについて一度考えてみましょう。

辞書によると、**education** は、ラテン語で「外に引き出す」ということを意味する **educere**（エデュース）ということばが語源であるということです。つまり教育とは、本来こどもの中にもともと備わっているもの（潜在的な可能性）を引き出すことなのです。

この教育のイメージは、私たちがふだん教育というものに対してなんとなく思っていることとはずいぶん違うものですよ。でもさかのぼって考えていけば、そもそもの教育とは、こどもにないものを無理に外から付け加えようとしたりすることなのではなくて、もともとこどもの中にあるものが外に出てきやすいように（発揮しやすいように）はたらきかけていくことなのです。

そして、この教育のイメージはこどもを主人公にすえた考え方です。日本ではまだまだどこか教育するのは親や教師で、こどもは教育をされる受身的な立場、というイメージが根強いのですが、その発想はそろそろ転換していった方がいいのではないのでしょうか？育つ主体であるこどもを守り育むことこそが、本来の教育のあり方なのです。

「教育」とはこどもの天分を引き出すこと。本書では一貫してそのイメージを大切にしていきたいと思っています。

—以上、第1章までの内容を抜粋して紹介—

>>> 第2章以降は、原著で